

## いのちの道 人の道 人類普遍の道を求めて

妙なる畑の会・赤目自然農塾主宰 川口由一

### 自然農について

“自然”という言葉は、“<sup>おの</sup>自ずから<sup>しか</sup>然らしむる”ということを示しています。何が自ずから然らしむるのかと言えば、いのちがいのち“自ずから然らしむる”です。いのちというものに、自然という性質があるということです。

それぞれのいのち自ずから絶妙に然らしむる絶妙の存在であり営みであります。そのようになっている自然界で、そうしかならない自然なるいのちでありますゆえに、その営みに添い応じ従う他になく、添い応じ従い任せることによって、最善の結果をもたらしてくれることとなります。自然に添い応じるのが最善、それぞれのいのちに従い任せるのが最善です。

自然農は、こうした自然本来である自然なるいのちの営みに添い、応じ、従い、任せる農です。それぞれの田畑においても、完結する営みが自然本来であり、そのように成っている自然界・生命界であるゆえに、自然農の田畑でもそう成るのであります。耕さず、肥料農薬を用いず、草や虫達、他の生物を敵としない自然農の栽培法、そして大型機械と石油を用いず、道具と手足を使つての作業は、いのちをあずかる農の心から離れず、決して大地や空気や水を汚染することなく、有限の資源を浪費し大切な環境を破壊することなく、いのちを損ね衰退させることなく、浄化、復活、再生ともなるものであって持続永続を約束してくれるものであります。また栽培過程において農夫のいのちを損ねることなく、食します人々のいのちをも損ね汚染することなく、十全に育った作物のいのちが私達のいのちを健全なるいのちへと養い育んでくれるものであります。

人類の誕生も、この今の存在も、やがて寿命至つての死滅も、自ずから然らしむるものであり、農において、衣食住において、生活すべてにおいて、いのち自ずからなる自然に添い、応じ、従い、任せるところに、真の平和と豊かさがあり、人類の全うがあります。

「耕さない・草や虫を敵としない・肥料農薬を必要としない」この三つの基本となるあり方は、いつの時代においても、地球上どこにおいても通ずる普遍のものであります。

### 耕さない

自然界における森や林では、いづこも耕していません。耕していない自然界においては、豊かないのちの営みを成し、そこで食べて食べられ、殺し殺され、生かし生かされ、ひたすらそれぞれがそれぞれのいのちを生きて共存共栄、生まれ育ち死に、親から子、子から孫へと絶えることなくいのちが栄え続けます。その場にふさわしい動植物が生命活動を営み、共に生死のめぐりを重ね、必ず自ずからいのちにふさわしい環境に変化し、いのち達の最善の舞台となっています。

そこを耕さなければ、多様な生物達の生存と生死のめぐりが自ずから成さしめ、健全なる生存が約束され続けるものであり、実に多くの動植物達がある場所その気候その環境に応じての生命活動を盛んにします。

耕さなければ、無数のいのち達が生死にめぐった死体が地表に重なってまいります。それは過去のいのち達の歴史の積み重なりでもあります。そこを舞台に次のいのちのお米や野菜、草々、小動物達、小さな微生物達が、親の続きをそれぞれ個々個々が生きて、同時に一体となって見事に生きてまいります。

不耕の田畑では、過去のいのち達の死体と歴史を舞台にして、地中でも地上でも多くの生物がひたすら我がいのちを生きています。この舞台が殊に大切であり決して耕してはなりません。耕せば多くの生物達を殺すことになり、大切ないのちの舞台を壊して、不毛の地と化さしめます。過去のいのち達が生き死にしてきたこの舞台で、今のいのちが生きることを約束されており、この舞台で計り知れない多様な多くの生物が常に生きております。他のいのちが生きているところでそれぞれが生きることができ、お米も野菜も生きることが出来ます。過去も現在もすべてが切り離すことのできない、一体の存在にして一体の営みなのであります。したがって決して耕してはなりません。

### 草や虫を敵にしない

地球上で人類だけ、水田でお米という草の作物だけ、畑でキャベツという草の作物だけでは、一つの生命圏で存在しえません。いろんないのち達が自然にそこに在ってこそです。いろんな小動物が住める環境はいろんな草が在ってこそです。一枚の田畑の生命圏に自ずから存在する多くのいのちすべてが生きるに任せ従っておけば、そこは常に豊かないのちの舞台となります。草々虫達を敵にしないで、あるがままの自然に任せておけば、いのちが大いに栄えます。それはとりもなおさず作物を生かし、私達を生かしてくれることとなります。

そこで食べることのできるものを採集すると採集生活ですが、お米やキャベツを育てる栽培生活でありますので、目的とする作物が他の草に負けないように、草の成育を押さえる必要があります。特に幼い時期には足元の草を抜き、成長初期には近くの草を刈り、その場に敷いておきます。作物が青年期へと育てば、足元にいろんな草があり、いろんな小動物が生きている方がいいのです。

あるいは、地力において、環境において、虫との関係において、乾燥具合や湿り具合において、土を流失させないことにおいて、土を豊かにするにおいて、草は絶対に必要です。草は敵では決してありません。栽培生活をしているという認識に立って、草に負けぬよう適期に草の成長を抑え、最小限度の手を貸してやります。

虫についても同じです。自然界においても自然農の田畑においても、害虫益虫の別なく、有効無効の別なく、すべてがゆえあってそこに誕生し、そこに今を生き、そこに死んでゆきます。いずれも一体となってこの今の絶妙の営みに欠かすことの出来ないいのち達であり、いのち達の営みをさらに豊かにするものでもあります。したがって、殺虫殺菌剤等々の農薬、除草剤は不要にして、決して用いてはいけません。虫が多く発生し、害を多く及ぼすことが生じるのは、栽培のあり方に問題があるからであって、特に耕して肥料を多く投入すれば、自ずからなる虫を害虫に追いやることとなります。

### 肥料・農薬を必要としない

すべてのいのち達が生きるに必要なものはこの自然界に自ずからあり、多種多様な生物達の生死の営みのなかで自然裡に用意されるものであって、他からいかなる肥料をも用意する必要はありません。作物と

共の様々な生物達の営みそのまま耕すことを必要としない、肥料を必要としない豊饒の舞台と成るものです。化学肥料、あるいは有機、無機、堆肥、ボカシ、微生物、酵素…、いかなる肥料も、他で用意し持ち込むと養分過多や片寄りとなって多くの問題を招きます。あるいは、農薬や除草剤を用いて他の生物を排しては、作物は決して十全に育つことはできません。一体なる営みの調和を乱し、田畑の営みは異常となり衰退します。持ち込まず持ち出さなければ、生死の巡りのなかで、一枚の田畑において、私達人間も含めて多種多様のいのち達が生かされ続けます。どのいのちも他を生かすために生きているのではなく、他を殺し食べ、ただひたすらに我がいのちを生きることが、そのまま他を生かすことになり共存共栄の関係となっています。

いのち達は生きる営みのなかで必要なものを、足元の大地から、歴史から、亡骸から、排泄物から…、あるいは水から、空気中から、太陽から、雨から、風から、他のいのちから、そして果てなきこの宇宙生命界から集めて我が身体を作り、次のいのちを作り、一生を生き、死して大地に死体を寝かせて、さらに豊饒の地と化さしめ、次のいのちを生かします。それぞれの生物達が生きて成長成熟し、次のいのちを用意し、我が死体を寝かせますと、それまでになかったものをそれぞれに作って舞台を絶妙に豊かにします。実ったものを田畑から持ち出し私達人間が食しても、不足をきたすことはありません。

自然農においても、生かされている田畑で、稲藁、籾殻、米糠、小麦のフスマ、菜種の絞り滓、畔の草、台所の生ゴミ等々、あるいは食べて出した排泄物等、必要に応じ作物の性質に応じ循環させ、他のいのちに巡らせます。生死の巡りのなか、いのちからいのちへの巡りのなか、栽培生活における田畑での巡りのなかで食糧は約束され続けます。他に依存することなくです。他から肥料を用意して持ってこなくてよいのです。持ち出さず、持ち込まず、生かされて生きている場で完結する自然農であり、自然界です。

大切な基本のことは、作物は肥料によって育つのではなく、一枚の田んぼのなかにゆえあって存在する他のいのち達と一体となって営むことによって、はじめて十全に生きることが出来ます。過去のいのち達の歴史の重なりの上に、多種多様な他のいのちが今ここに宇宙生命界のすべてと一体となって生きているから、生きることのできる私達人間であり、すべてのいのち達です。

## いのちの世界を知ること

私の生き方を、私の人生を、私の生活をどのようにしてゆけばよいのかということは、生まれてきた時に一人ひとりに課された課題であって、それぞれ一人ひとりが明らかにしてゆかねばなりません。一人ひとりが明らかにすることが、人類全体が明らかになり人間社会が明らかになることにつながります。

一人ひとりが私の人生を明らかにする、人としてのあり方を明らかにする、あるいはこの気候風土に生かされる日本という国におけるあり方を明らかにし、あるいは人類全体のあり方を明らかにしなければ、暗闇のなか道なき道の混沌混乱無秩序の人間社会となり、この宇宙生命界において最低の生物にして最大の不幸に陥ることになります。

一人のあり方においても、国のあり方においても、人類全体のあり方においても、現実においては明と暗が入り混じり、不安なこと、悩み苦しむこと、恐ろしいこと、悲しいこと、愚かなること、耐え難き不幸なることが多くあります。人本来のあるべきあり方を明らかにするべく、どこが間違っているのかを見きわめた上で正しい答えを明らかにする。それは私にとっても、私の人生においても、人類全体においても、すべてのいのちにとっても、地球にとっても、すべてのいのち達の舞台である環境にとっても、宇宙にとっても、今、最も大切なことであります。

大切な私の人生を考える時に、基本になるのは、いのちの世界でいのちあるものとしてのあり方を明らかにすることです。いのちあるものとしてのあり方を明らかにするには、このいのちの世界がどうなっているのか、それを明らかにしないと見えてくることはありません。いのちの世界とはどういうことなのか…。あるいはいのちの世界はどのようになっているのか…。あるいはいのちとはどういうものなのか…。それは、この宇宙、この自然界はどうなっているのかと同じことですが、ここを一人ひとりのなかで明らかにすることが、私の人生を生きるにおいて、あるいは人類が生きるにおいて、欠かすことのできない基本のことになります。

## 時・空 時間 空間 そして宇宙

時の流れがあります。時計の針が回るから時が流れるのではなくて、時計で時の流れを察知しております。この宇宙に目には見えない、触れることのできない、聞くことのできない時の流れが事実としてあります。あることが不思議という言葉を使わざるをえない事であります。刻々と流れています。誰かが時を流しているのではなく、自ずから流れ続けています。その流れは、何をも必要としない自ずから然らしむる自然の流れであります。

時があり、時の流れがあり、地球が動き、回り、巡っています。月も星々も動き、回り、巡っています。太陽も動き、回り、巡っています。この時の流れ、それぞれの活動、自ずからです。地球も星々も自ずから、太陽も自ずから、銀河も星々の集団も自ずから…。すべてが自ずから然らしむる自然の動き、回り、巡りであります。私達人類も日々刻々の成長生育です。すべての生物みな、誕生あり、生育あり、老いあり、死あり、いずれにも過去あり、過去から現在あり、そして未来への流れがあります。時があり、時の流れで動き、回り、巡り、生まれ、育ち、老い、死に、変化変化です。時は一方向に流れるゆえに、同じところを回り巡っているのではなくて、刻々と違うところに行き、刻々と変化し、刻々と新た新たです。

それぞれに姿形を現し、活動し、変化し、巡るすべてに、いのちが宿っています。いのちを宿しているゆえに活動し、自らの性能性質に応じて働きを成し、自ずからのいのちの営みでの、それぞれの動き、活動、回り、変化であり、色、姿、形、香りであります。

ところで、それらをあらしめる宇宙本体は、すべてと別なく一体であります。同時に別であり、姿形がありません。本体は姿形を現すことなく有り続けています。本体から生じ活動し変化するそれぞれに宿っているいのちも姿形なく、刻々と営み流れています。姿形なきいのちが営んで姿形を現し、その営みは休むことなくひたすら営んで、誤ることなく違えることなくです。

この営む“いのち”が即ち“時”です。その“いのちの営み”が“時の流れ”です。時計の針が刻んでいるのは、いのちの営みです。時の流れはいのちの営みであり、本体のいのちも本体から生じた個々個々のいのちも姿形はなく、いのちの営みによって姿形を現し生じているこの自然界・生命界です。

自然界あらしめるいのちの営みを「時」という言葉で認識し、営む場を「空」という言葉で認識しています。人類は、「時」と「空」という言葉でもって、目には見えないいのちといのちの営む姿を認識したのです。あるいはこの自然界・生命界で起こっている出来事から、「時」と「空」という言葉が生まれたのです。

宇宙本体のいのちに時と空の別あり、空において、いのちが営む時が流れ生じて、新たないのちの誕生あり死滅ありの宇宙自然界・生命界です。誕生したいのち達が生まれ営み死滅して、生滅生死は終わることなしです。この営んでいるいのちが存在することのできる世界、流れることのできる場、めぐることの

できる舞台があつて、やはり姿形がありません。流れる時も姿形なく、いのちの営みも姿形がなく、いのちが営みを行う場も姿形がありません。このたくさんのいのち達が営み生滅を重ねる場を、空という言葉で表しています。

この時と空は事実においては二つに分けることのできないいのちのことです。すべての大元である本体はいのちで、いのちには時と空という二つの性質と二つの働きがあります。あるいは、二つに分けて認識することができます。分けることのできない絶対なる存在であり営みである本体のいのちは、相対する時空でとらえることができるのであつて、絶対界における相対界です。そして、時は始めなく終わりなく有り続け、空は果てなく広がり、きわまることなき広大無辺の空なるいのちの世界です。

また、時空とは宇宙のことであり、宇は空、宙は時です。そして宇宙はいのちです。この宇宙生命界にほんのひとときの体を得て生命活動をするすべてのいのち達であり、私達人類であります。

私達一人ひとりのいのちも人類という生物も、ある時に生まれやがて死んでまいります。本体なる宇宙生命は、生滅生死なく、始めなく終わりなく、有り続けています。この無始無終の宇宙に、そして果てのない無窮の空に、百年前後の時の間なる時間と、この身体あらしめる空の間なる空間を授かつての人の一生です。いのちの世界が空間なく塗りつぶされているものならば、あるいは流れる時がなければ、生まれることなく、存在することなく、営むことなく、動くことなく、死ぬことなく、この自然界は有り得ずです。宇宙における時なるいのちの営みは空においてであります。私達人が百年前後の時空間を得ての人生における願い、想い、希望…は、物質の世界での制約を受けるさだめ（運命）を悟り、解放された自由な心で、宇宙の法に応じ、自然界の理に従い、人の人たる道を得て、心はずませ、思い願い、念じ描き、喜びの日々に、納得の日々に、幸せの日々に、真に美しい豊かな人生に、平和な人間社会に具現化し実践してゆくことができるのであります。

この人間社会も、私の存在も、百年前後の人生も、どこにあるのか、どこで営んでいるのか、いのちの営みとはどういうことなのか、何故生まれ、何故育ち、何故死んでゆくのか、何処から来て何処に行くのか…。時空、あるいは時間と空間の認識、私の存在の認識、あるいは私の存在している世界の認識と、人間の分、私の分の正しい位置づけは、生の期間に道を得て平安裡に全うすることに欠かすことのできない基本となります。

## 無 と 空

「無」は“無い”ということで、「無」の反対は「有」です。「有」というのは“有る”ということです。“生まれる”「有」、「死ぬ」「無」、有る無し・有る無し、生まれる死ぬ・生まれる死ぬを休むことなく終わることなくの生命界です。人が作り創造すると「有」、やがて崩れ壊れ崩壊すると「無」。いずれも姿形の有るもの、すべていつかは無くなるさだめです。

「空」は、こうしたいのちの営みからすべてのものが誕生し、あるいは人が創作し、姿形を現し、働きをなし、活動し、生死の巡りをくり返している舞台を指し示す言葉であつて、何も無いところのことです。「宇宙」の“宇”が示すところです。また有無生死に営む「時」は、「宇宙」の“宙”が示すところです。「有」、「無」、「生」、「死」は、宇宙におけるいのちの営みである時の流れと、宇宙における舞台である空における出来事です。

「時」と「空」は有り続けるいのちの世界であつて、無となることはありません。数字で言えば0です。「有」は数字で言えば1、2、3、4…で、時の流れで生じ、姿形の有るもの、働きのあるものです。有

るものが壊れ死ねば無になり0となります。0となれば、残るのは時空で、時空は有り続けるものであって無になることはありません。死して「有」が「無」となり0となれども、0は単に無ではなく、有り続け、決して無になることなき時と空を意味する数字でもあります。

無と空の文字の多い般若心経は、この時空に存在する私達が、例えば、肉体や金銭や名誉や地位等々、無知と愚かと欲心から常なきものへの執着が強くなり、悩み苦しみ怖れおののき魂からの平安を失うことがあります。いずれもひとときの存在であり、有であっていつまでもあるものではなく、やがて必ず無くなるさだめであることを知り、執着から離れ、有り続けて無くなることなきいのちの世界の真理を悟り得て、魂から平安に至り救われる道案内をしています。

「空」は、すべてを生滅あらしめる果てなきにして、有り続けて無くなることなき宇宙本体です。「時」もまたすべてを生滅あらしめる営み有り続けて、終わることなく営み続ける宇宙本体です。本体は、姿形がなく、音なく、色なく、香りなく、「空」と「時」なる性質と働きを有する「いのち」です。時空ある大いなる本体のいのちから無数のいのち達が生死、有無、生滅を現し営み行い巡り、一人の人間は体を現し有し、死ねば無となり、本体である姿形なき宇宙は、常に絶対にして明々白々静々粛々であり永遠であります。

## 生 と 死

姿形あるものはすべてもとよりなかったものです。人類もある時地球上に誕生し、その後は男女の営みにより新たに誕生し、親から子、子から孫へと生死に巡って、今にそれぞれの姿を現しています。しかし今に生の営みをするものもみな、必ず終わりがあり、死があります。誕生と死の間には生の期間があって、いのちの営みをいたします。

このいのちの世界における人という生き物は、全うするに百年前後の時間を必要としています。お米は六ヶ月、ジャガイモは四ヶ月の時間でいのちを全うします。すべてのいのち達の寿命は過不足なく与えられています。そこにおいても自然界は絶妙にして誤ることなしです。人という生き物が地球上に数十万年数百万年前に誕生してきた時に、一生を全うするに必要な時間が与えられていなかったならば、全うのしようがありませんが、全うするに必要な時間はもとよりすべてに与えられています。そして生きるに必要なものはすべて自然界にそろい足りており、ゆえあって存在するすべてのいのちは生きて全うすることのできる智慧と能力を宿しています。この自然界における絶妙な「足る」を知らねばなりません。

ところで、生と死についてですが、これはいのちの営みのなかでの出来事です。いのちの営みがあって、その営みのなかで生まれ、育ち、老い、やがて死に至ります。現象として、「生まれる」「育つ」「次のいのちを産む・育てる」「老いる」「死ぬ」が現れますが、それは同じ一つのいのちの営みのなかでのことであり、いのちの世界における姿形のあるものみな相似た営みであり、相似たさだめのなかにあります。地球も太陽も銀河の星々も、小さな生き物、目には見えぬ微生物、みなそのさだめのなかであっての生死であり、今日のいのちの営みです。人もそのさだめのなかにあることを理解し悟らねばなりません。そして、生きる時は生きる。死ぬ時は死ぬ。生きる時は死ぬことを怖れない。死ぬ時は生きることに執着しない。いずれもいのち自ずからのことで、一つのいのちの誕生も、成長、成熟、老いも、死ぬも、いのちの営みのなかで自ずから運ばれてまいるものです。今日に至るまでたくさんの人々、無数の生物が生まれ死んでいき、今後も数えることできずに生まれ死んでまいります。

いずれも自ずから運ばれての生死ですが、人は他に生かされるなかで自分のいのちを自分で生き、自分の人生を描き創造することのできる存在です。いかようにも生きることができ、幸せの生の期間、喜びの生の期間にしないと、生きることがつらくなってしまいます。道を見失い、道から外れ、人としての我が魂を見失い不幸の人生に陥ってしまいます。生きている時は生きようとする本来の営みを失っては、あるいは心豊かで平和な日々を願う心をうち捨ててしまっはいけません。

「誕生が嬉しい、成長が嬉しい。でも老化が始まってくると寂しい。哀しい。死が近づいてくると怖い。死ぬのはいやだ。」となるのは、存在を正しく認識できていないゆえであり、生を正しく位置づけていないゆえです。老いというのも、同じ一つの営みのなかでの現象で、成長成熟という営みのなかで老い、その営みのなかで死に至ります。誕生、成長が喜びならば、老いも死もまた喜びであり、生きている時は生きるのが喜び、死ぬ時は死ぬことが喜び。ここが本来です。肉体に執着すれば、あるいは物質に執着すれば、死が怖くなります。執着することなく、生死のさだめを悟れば、この営みのままに任せて、生きている時は生き、死ぬ時は死ぬ。この生死のほどを明らかに観て悟り知り、不安に、哀しみに、怖れに陥ることなく、幸福の、喜びの、平和の日々となるように成人いたさねばなりません。悟るしか他に術なきさだめを悟り得ることによっての解決であります。

生死を正しく位置づけて、他力によって自ずから生かされ運ばれると同時に、自力によって自分の人生を確かにいたさねばなりません。百年前後の生の期間を与えられている私達人は、青年期から壮年期に入る頃には、いのちの道、人の道、我が道を得るまでに成長していなければなりません。いのちの世界のことも自分のことも理解し、どこに幸せがあつてどこに喜びがあるのかを明らかにした上で、その時その時を全うする日々とし、死の不安から解放され、さらに日々に成育成長成熟し、やがてある時死期に至って死に運ばれ、一人の人生終わりとなり、全うして次へと運ばれてまいります。

この死んだ後のことを正確に認識し、生まれる前のことも正確に認識するのも大切であります。死後と生前を正確にして生の期間がさらに明確となり、この今に信が入ります。死んだ後と生まれる前のことを明らかにするということは、このいのちの世界の実相実体を正確に認識する、この絶対なる宇宙を知る、あるいは大いなるいのちを知る、あるいは時空におけるそれぞれの存在を正確に認識することです。そのことによって、さらに今を生きることが明確となり、魂からの悟りを得て平静なる日々となります。

人が死ぬように、木々草々鳥獣達も、地球も、太陽も、銀河の星々も、すべての姿形あるもの、働きあるもの、生まれてきたものは、必ず死に至ります。生まれてきたものは、いのちが営んで自ずからいのちを燃焼しながら育ち成熟し、やがて尽きて死滅し、次へ運ばれます。この肉体は死んで分解して空に放たれ、新たなところで異なるものと合い成し、新たな姿形を現しての新生です。天において新しい星が生まれ、地において新しい生物が生まれ、生の期間を営み、やがて滅して、また新たな星が新たな生物が誕生する素となります。あるいは他のいのちの糧となり、他のいのちに回ってゆくことにもなります。死んでなおかつ次へ次へと展開して終わることなしです。

一つのいのちが死に、肉体が死んで、そこに宿っていた靈魂、魂魄、神性、仏性、いずれもが離れ、本体に還り、それで一人のいのちのすべてが終わりです。その人の思想、哲学、宇宙観、宗教観、人生観、あるいは宗教心、芸術心、美意識、善なる心等々人間性として養い育んできたすべても、必要なく働くことなく、いのちの死と共に終わります。いのちに宿る靈魂、魂魄、神性、仏性は、姿形なく、もとより有する本体からの性質や働きであり、もとよりのいのちの根源に宿り働きを成すもので、一つのいのちの死と共に終わりますが、なくなることなく本体へ還ってゆくと理解できます。

新しく誕生した人のいのちにも、もとよりの靈魂、魂魄、神性、仏性が必ず宿っており、肉体の成長

と共に輝きを増し大いに働くべく育って、思想、哲学、宗教観、宇宙観、人生観、あるいは、宗教心、芸術心等々をも養い、人間性を育んでまいり、真の経済力、政治力、生活力…をも養い、大いなる働きをなして、人生の成熟完結へと當んでまいります。新しい次のいのちが優れた先人の思想哲学を受け継ぎ、受け継いだ人の思想哲学となって生きてまいります。

すべてのものゆえあって、姿形を現します。地球もゆえあって約四十七億年前に生まれました。やがてゆえあって死に滅してまいります。生まれる前も死んでからも、生きている時も、空なるいのちの世界は常にあり、営む時は常にあり、常にあるいのちの営みによって、姿形を変え働きを変えてのそれぞれのいのち達の生死の巡りです。人類然り、私達一人ひとりも然り。このいのちの世界におけるいのちの営みが始めなく終わりなくあり続けているなかでの出来事です。百年前後の生の営みは確かな事の実であり、かけがえなく貴く尊いものです。やがて死して次に運ばれ、新たな展開で、厳かなるいのちの営みは終わることなしであります、いつでもどこに巡っても、ここ、この宇宙生命界のなかであって、何処にもまいることなしです。

一人の人間の過去をたどれば、両親祖父母、やがては人類の始めまで、さらには人類を生んだ始めなきいのちの始めまでさかのぼることになり、人類の歴史、生物の歴史、地球の歴史、始めなき宇宙の全歴史を重ね、さらに終わりなき未来へと歴史を重ね続けるいのちであります。

#### 狩猟採集生活と農耕生活からの私達人間の姿

縄文時代の人が残した縄文土器と、弥生時代に入っの弥生土器、あるいはさらに古墳時代をきた人達が残した古墳土器の違いがありますが、土器を通して縄文人と弥生人、古墳人の違いが見えてきます。人が生きるに要となる食文化において大きく分けたならば、縄文時代は狩猟採集を主とする時代で、弥生時代は農耕を主とする時代、さらに農耕生活が定着し安定し食糧が約束され始めた古墳時代という違いがあります。縄文時代もすでに栽培をしていたことが考古学的にも明らかにされてきていますが、大半は狩猟採集生活です。海や野山を駆けめぐり、射止め捕獲し、その恵みを見事に手にして生きていました。やがて、弥生時代の農耕生活に入ると、自らの手で栽培をして生きるようになりました。さらに定住して栽培を行い、多くの人々が確実に育て収穫する古墳時代へと歴史を重ねてまいります。

栽培生活に移行するにつれ、人が集団を成して生きる規模と政治において大きな変化をみせます。縄文時代ももちろん小さな集団を形成し、長が治めての人々の生活が成り立っていました。弥生時代に至るにつれ、集団が大きく広い地域と多くの民を治めてゆく変化は自ずからであります、そうした部族、氏族、集落が日本のあちこちにあり、人々の農耕中心の生活も食糧の増産で約束されるようになった古墳時代に入って、日本のあちこちに点在する集団をさらに広く統一しようとする動きとなって、日本の国家体制の始まりです。日本における都市を形成しての都市文明の始まりでもあります。古墳時代に入って、奈良県纏向の地における大和朝廷の始まりであり、やがて飛鳥、奈良、平安時代…へと国家体制が整い、国を治め民を治める政治が成され都市文明が繰り広げられてまいります。

ところで、いのちあるものにとって最重要となる農において作物を育てる技術を身につけるのは大変ですが、しかし育てる技術を獲得した人類は、整ったところで形通りにやるだけでお米は育ってくれるようになり、食糧は確保できて生命は約束されるようになりました。縄文時代の野山を駆けめぐっている時代から、一カ所に定住し栽培生活を行う弥生時代に入ってくると、人の全智全能の働かせ方が異なってきます。境地が一段低くなり、智力能力を多く働かせなくなります。働かせなくともお米は育ってくれて、飢



え死にすることはないからです。

野山を駆けめぐって自然の恵みを手にするには、高い境地と優れた智力能力が不足すると、あっという間に殺され飢え死んでしまいます。自然界においては食べて食べられて殺し殺されてですから、自然界の厳しさに耐えられないと生きてゆけなくなります。私達は草木を鳥を魚を獣を食べる対象にしていますが、反対に人もまた、食べられる対象、食料となる対象でもあります。天候も気候も厳しく、常に激しく厳しいところに身をさらされていますので、それに耐えるだけの生命力を養い全智全能を働かせないと死んでしまいます。自然から大きく離れた今日私達がそうした生活を強いられると、自然界で一人生きる智力能力を考えられないほど衰退させていることに気づきます。

ところで、描いたもの、作ったものは、そのままその人の姿であり、その時代の姿です。それが縄文土器と弥生土器、あるいは古墳土器、あるいは今日の人達の作った土器に、時代性や人間性の違い、智力能力の違いが姿形として表れます。そこに、人の精神性や人間性、芸術性、装飾性、宗教性、時代性や民族性、地域性、さらにはその境地の違いをも表しますが、縄文から弥生を境にして、智力能力と境地が根底で変わっているのです。縄文時代の場合は、全智全能を働かせて、一人でしっかりと立っていますが、弥生時代は、生ききっていない、どこかにすがっている、寄りかかっている、停滞している、生きることに暗くなっている。さらに古墳時代に入ると、人としての心の自由、いのちの活動、精神躍動の停滞が少しずつ進んでまいります。そうした姿が見えてきます。

人が作ったところ、自然から大きく遊離した人工の街、あるいは科学文明、物質文明の恩恵にあずかっている現代の私達ですが、人工の居住圏を作るのは大変でも、作ってしまったところに身を置くと、安易の中で生きることができ、便利さの追求によって、さらに怠惰に、やがては退廃に、そして滅びへと、衰退してゆくの常です。自然界に一人、身を置いて立つというあり方、智恵と能力、そして高く澄んだ境地を必要としないゆえに、安易な立ち方になります。智恵や能力も眠らせてゆきますこと自ずからです。その違いが縄文土器と弥生土器に、さらに古墳土器に表れています。人の姿が、生きるという根底の基本のところ、全く変わってしまっているのです。

縄文時代の先に石器時代がありますが、石器時代の人々は縄文時代にも増して高い境地で全智全能を働かせて生きていたことが残された石器から観えてまいります。やはり自然の恵みを絶妙にもらい、全智全能をよく働かせ、厳しい中でも生きていたのです。石器の姿にも、縄文期前半における縄文土器の姿にも、よどむところがありません。縄文の後期晩期に入ってくるとよどみ停滞し、あるいは生命力が衰退し、晩期に至るにつれ萎縮してゆく姿が顕著に現れてきますが、弥生時代とは立っているところが違います。

石器時代の人々が作った石器を見ていると、その生きている姿によどむところがなく、寄りかかるところがなくて、生きて全き人の姿をしています。その姿を見ていると、今日の私達は本来の生きる姿を見失ったゆえに、善悪、真贋、美醜の別をつけ、正誤を極め、執着からの解放、不自由から真の自由へ、さらに絶妙の境地を必要としています。そうした分別の必要はなく、解放された自由の中で生きている姿がそのまま美しい。それは真であって、偽りではなく、表面的ではなく、そして悪がない、善そのもの。芸術性も宗教性も、本当に豊かに息づいています。

宗教心や宗教性、芸術心や芸術性は人間性の中にあって、曇ることなく澄み渡り、全智全能働いているならば、もとより人という存在の中に自ずからあるものです。全智全能大いに働き、今を確かに生きているならば、芸術性も宗教性も、芸術心も宗教心も、しかも美醜の別を超えて美そのもの、善そのもの、真そのものとして息づいているはず。それは、絶妙の境地、絶妙の姿、絶妙に生きている人の姿であって、それが人本来の姿であり、その姿は縄文土器では中期以前に現れ、早期や草創期においてはさらに初々しく新鮮なるいのちの姿が顕著に現れています。

そうした時期も経て、いろんな時代を生きて人類はここまで生き続けてきました。こうしたなかで少しずつ全智全能が働かなくなり、生命力も人間性も衰退退化してきました。部分しか働かせなくなってきました。特に今日に至っての都市文明、科学文明はいのちを観ず知らず、自然から大きくかけ離れたものとなり、そこに全存在を置く私達です。眠らせている智恵、あるいはもう働かなくなった尊い能力がたくさんあるはずです。

今日生きて生の期間にある私達ですが、かつては古墳時代を生き、かつては弥生時代を生き、かつては縄文時代を生き、かつては石器時代を生きてきた私達であり、その続きのいのちです。あるいは人類が誕生した時代を生き、さらには人類を生んだその先の時代をも生きた私達であります。始めなき過去のすべての時を経験してきたこの今の私達です。長い長い歴史のなかで養われ培われてきた智恵と能力は、必ずこの身体の中にあり、その時々を経験のすべてがしまい込まれ、記憶され刻まれています。たとえ眠っておりましても、もとよりそうした智力能力を宿していますので、今に残されているものから過去の人達の生きて全うしている姿を見ると、何ともいえず感動し、親しみを覚え、隔たりを感じなくなります。本来の私の姿をそこに観ますゆえに、別なく何とも言えず懐かしく、魂からの出逢いを成します。宗教性も芸術性も人間性も豊かに息づいて、美しく、全智全能よく働いて絶妙であるその姿に、静かな深い感動を覚えます。私の本来の姿もそうですから、その姿に出逢って本来の私が目覚めたのであります。

かつては猪を追いかけ、鳥を追い、獣を追いかけていたのですが、今は猪に追いかけてられ、鳥に実りを奪われ、獣に襲われ、田畑で住宅地で悩まされている私達です。かつてと反対になっており、守りの体制をとっています。いかに守れるか、その知恵比べをしているのですが、なかなか根本の解決につながらず、生ききれず、守りの姿勢、受け身の体勢になって悶々としています。その姿は前半期の縄文土器から見える姿ではありません。弥生時代の姿、あるいは古墳時代の姿、やがて今日に至る悶々とした、鬱々とした生きられない姿、どこかに身を寄せて拠り所を持ったところで不安を抱きつつ生きている姿…。約束される衣食住に寄りかかり衰退してまいります。この自然界で全智全能働かせて、絶対の境地を得て、与えられているこの身体と内に宿している魂からの智恵で、しかと立ち正しく生きるならば、農耕生活といえども天地自然のなかでいのちを躍動させた人間の復活を成すはずです。

土器を通して縄文人の姿を見ると、中期以前は本当に強く生きています。しっかりと一人で立ち、一人で生きています。ですから美しい。優れた宗教心も、澄んだ美しい芸術性も息づいています。そして不安がありません。弥生時代の土器は表面的には美しく、静かで優しいのですが、その奥は閉ざっていて魂が鬱々として不安となり、古墳期に至るといのちはさらに停滞してまいります。

弥生人は、与えられている身体と宿しているいのちからの全智全能すべてを使い働かせて生きることをしなくなりました。そうしなくてもいい状態に自らの手で作り整え、そこに身を寄せ、いのちをあずけ置き、そこに依存して生活するようになったゆえに、生命力と精神の衰退が始まり、古墳時代から飛鳥、奈良平安時代へと衰退は加速し、やがて今日に至る私達は自然からさらにさらに大きく離れ、科学文明、物質文明、都市文明にすっかり身をあずけ、いのちの退化、生命力と生きる智恵と能力の衰退、精神の軟弱無力退廃顕著となり暗闇に陥りました。こうしていのち本来の生きるいのちの道、人の道を見失ってきた私達人類であります。

## アイヌ民族と縄文人から民族性と人間性を考える

過去をたどれば地球上に人類は存在せず生物存在せず、やがてゆえあって誕生いたしました。地球も同

じであり、姿形あるものすべて同じです。人類の誕生は数十万年数百万年前と言われます。アフリカに初めて誕生し、あるいはあちこちどこかの地に誕生し、増え、やがて地球上のあちこちに移動移住したと言われています。この日本の大地にもある時誕生したのが原住民なのか、最初に移住してきたのが原住民なのか定かではありませんが、アイヌ民族や沖縄の人達、あるいは縄文時代の人々は最初にこの日本の地に住んでいた人々の子孫で、北から、東から、南から、西から、あちこちから移動移住してきたのだらうとも、いろいろな説が立てられていますが、本当はどうなのか。いずれであってもこの日本の気候風土に生かされ、この大地に長く長く生きてきた人々です。

その後、朝鮮半島から、中国大陸から、あちこちから人々がまたまた移動してきて、すでに生活していた原住民、先住民を北と南に追いやったとも考えられていますが、いずれであっても同じ人類です。同時に少しずつの違いがあり、身体の違い、あるいは文化の違い、生活風習の違い、あるいは人生観、自然観、生命観、そして生き方の違いがあり、やがてはいろんな人々が入り混じっての今日の日本人です。

ところで、アイヌ人という場合は民族性からの観方であり、縄文人という場合は時代性からの観方であり、民族性、時代性が重なった観方でもあります。これらはいずれも表層の観方であり、別のつけ方です。その民族性は地域性でもあり、地域固有の思想や自然観、生命観は、気候風土や食べものとの関係が深いと考えられます。親から子、子から孫へと続いてきたいのちと生きる人々に切り離すことのできない自然環境、生活環境、食生活からのものであります。特長のあるアイヌの人達や沖縄の人達は、身体作り、顔の作りから、今日もなお違いがあります。残されている文化遺産から過去にさかのぼってみれば、大きな違いを感じます。表情も、眼光も、動作も、生活も、文化も、自然観、生命観、宗教観……も、また装飾性も、言語も、造形性も、色彩感覚も……、今日の時代からみれば独特であり特殊でもあります。

沖縄人であれ、アイヌ人であれ、あるいは縄文人であれ、元々日本の原住民、あるいは先住民であろうと言われている人達は、衣食住すべてにおける生活全体が大自然のなかです。弥生時代の農耕生活に約束されたところに定住した定まった人々とは異にして、厳しい自然界の約束されないところで、常に自然の恵みをたくみに手にしての生活です。厳しい自然界に身を置いて生きてゆく狩猟採集生活での食生活は、農耕生活者とは異にしたものとなります。そうした食生活や日々の生活全体から作られた血液、肉体であり、生きる術であり、方法技術の習得であり、精神であり、魂です。大自然の中に放り出され、我が一つのいのちを依りどころに智慧深く逞しく生き抜いてゆく人々の人生観、宗教観、生命観、自然観、宇宙観…は、農耕生活者とは異にすること自ずからです。

今日の私達は、人類の歴史で経験したことのない、自然界、生命界から大きく遊離した人工の都市環境に住居し、科学文明、物質文明のなかにいのちを置いての生活ですから、さらに大きく変化し、大きな違いとなっています。

日本古来の原住先住民族と中国や韓国からきた人達の違いは、地域性や民族性の違いで、人間の本質と人間性の違いではありません。縄文時代と弥生時代の違いは、時代性の違いです。これら民族性や地域性の違い、時代性の違いは表層面でのことで、さらに現代は個性が強く重んじられますが、個性は最表層のものであって、人間性と境地がいずれの地においてもいつの時代においても大切で、人としての基本となるものです。

ところで、身体に表れている身体からの民族の違いを見れば、その違いは今日も大きくあり、インドの大地に生きる人々との民族の違いを強く感じます。あるいはエジプト、あるいはタイ、あるいはギリシャ、ヨーロッパの人達、あるいはアフリカの人達の民族性も異にします。それらは気候風土や生命界における種々の関係のなかで作られてきた民族の誕生当初からの身体の違いでもありますが、いずれも人間性の違いではありません。あるいは立ち方の違い、境地の違いではありません。

残されている文化遺産から観えてくることですが、精神面で、文化文明面で、芸術宗教面で、民族性が表面に顕著に表れるのは、今から約六七千年前、恵まれた川の流域で農耕が栄え食糧が約束された都市文明が誕生し栄え始めてからのことで、さらに過去にさかのぼる時代の人々からは、民族性を超え、東洋西洋の別をも超えての優れた人間性と境地で生きています。エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、中国文明、あるいは古代ギリシャ文明…。いずれの地においても初期は、人としての優れた人本来の普遍の姿を現しています。やがて民族性が現れ顕著となりますが、都市文明が栄えるにつれ、人々の精神は退廃してゆき、生命力は軟弱となって都市文明は崩壊してゆきます。誕生と崩壊の歴史を重ね今日に至るにつれて、民族性も優れた人間性も人本来の高い境地も失われてゆき、現代に至っては、最も表層面の個性が全体に強く表れ、その個性も人として低い醜い人間性が頭をもたげ、境地は低下し智力は曇ってきます。

ところで、縄文土器を通して当時の人としての姿、人として立っている境地を観ることができるのですが、時代性や民族性を観ること以上に、その奥にある人間性を観ることによって、深く当時の人と出会い、へだたりなく親しみを覚え懐かしくもなります。

優れた人が造った優れた縄文期の土器からは、天地自然を駆けめぐり、人としてしっかり立って強く生き、それにともなって人間性も豊かで根底の深いところから魂の平安を得て静かに生きている人の姿が観えてきます。もちろん、縄文時代も草創期と晩期は全く異にしており、初期すなわち草創期、早期、前期の古い時代の人達の方が優れており、後期、晩期になれば生命力が衰退し、人として劣り境地も低くなってゆきます。また同じ縄文期においても地域によっても大きく異にしており、優れた集団と劣っている集団があります。新潟県十日町市野首遺跡から発掘された縄文中期の火焰土器から、ここに生きた人々とこの集落を治めた長は、優れた智恵と能力を養い持っていた人格者であったことが伺え、こうした豊かにして静かな魂の安定を得ることは、いつの時代においても欠かすことのできない基本となるものと悟られます。

残されている主に土器、土偶、石器、あるいは装飾画から観えてくる人間の姿ですが、弥生時代と縄文時代を比べると、弥生時代は表面的で、根底に不安を抱き智恵曇らせており、それ以前の縄文時代前半の人々の方が根底からしっかりと生きて魂からの平安と安定を得て静かであります。それはどこの国でも同じで、時代を過去にさかのぼるほどに、あるいは一つの時代の初期の人々は、存在の根底から美しく豊かで真に強く優れ、明るく今を生きる新鮮で平安な姿を現します。現代人のように表層面の個性を現すとか表面的に美しく飾るようなところには陥っていません。あるいは醜い醜悪な人の姿を現すことはありません。

自然から遊離し人工の都市文明に身を置く人々は、紀元前後を境にして大きく変化し、近代から現在に至るにつれて、さらに表面的になり、基本となる人間性、人間性の根底にある魂が軟弱になり、退廃、荒廃、ついに人間性の喪失、人間性の病み崩壊した姿を現します。日本においても顕著であります近代化著しい科学文明、都市文明、物質文明を栄えさせている国々において同じ衰退の過程をたどっています。

エジプトにおいても紀元前後を境にギリシャ文明が入り、地域性、民族性がなくなっていくますが、民族性の根底にある人間性をすでに見失っているゆえに、民族性を異にするギリシャの民族性に惹かれて冒されることにもなり、それを表面的なところでまねるようにもなり、エジプト民族は自らの内から滅びていきます。民族性は表面的なこと、その根底の人間性が欠落し壊れていき、我を見失い、エジプト文明数千年の歴史が崩壊します。

アイヌ文明も、独特の民族性や地域性があり、当初はしっかりと大地に立った人々であったのだろうと思われれます。時代の変化、時の流れとともに人々が道を見失い滅びてゆきます。ゆえあって時代の流れと

共に思想が変わり生活が変わっても、根底に魂からの人間性が豊かに養われていたならば、人の道、いのちの道を得て精神は滅びず、人格も滅びることはありません。いのちの道、人の道、民族の道、我が道を見失うゆえに、西洋文明、すなわちいのちの道からはずれた物質文明に冒されてしまうのです。ゆえあるならば時代性や民族性は滅びるものでありますが、人本来の正しい人間性を見失い滅ぼしてはいけません。人本来の人類普遍なる真の思想、哲学、あるいは生き方を根底にしかと持てば、表層の地域性、民族性、時代性は消失し、ましてや個性を重んじ主張するといった誤りは起こりえず、さらに明日に向かう確かな優れた人類普遍の文化文明が生まれてくるものです。

民族性や地域性、あるいは時代性を観つめ思索すれば、なるほど違いはあって、いろいろな異にする姿が観えてきますが、根底の人間性のところで観つめ考えていかないといけません。縄文時代の人を観るとき、表層面の民族性、時代性の特殊性をみて感動するにとどまっていたならば、当時の人を観たことにはならず、時代の流れを超えて優れた縄文期の人々に出逢うことはできません。縄文時代を代表する火焰土器は動的で生命力がみなぎっているとも言われていますが、本質はなんともいえず静かで、魂は安定して平和です。奥深いところで安心を得ています。いのちが動的に活動盛んにみなぎり、ドロドロ躍動しているわけではありません。表面的な文様はなるほど動的とも言えますが、立っている魂の姿はなんとも静かです。深く根源を観通して、本来あるべき人として、いのちあるものとしての変わることなき普遍の生き方を明らかに観ることが大切です。

中国においても、殷周時代、春秋戦国時代とさらに時代をさかのぼってゆけば、民族性は影をひそめていきます。さらに石器時代にさかのぼれば、どこの国にも共通の石器があり、石で作られた鍬や斧に民族性はありません。あちこちの地から発掘される石器の姿と心は共通して違いがありません。それは本来の人の姿なのです。形も自ずから同じような形になり、その姿に個性や民族性はありません。もちろん個性も民族性も抑圧してはならず、解放したなかで個性や民族性の別を超えた人間性を発現するものです。そこに至ってはなんとも魅力が深く、人本来の豊かないのちの実に優れた人間の姿を発現するゆえに、真実を求めてやまぬ今日に生きる者も強く惹かれ、自己実現をこい願うのであります。

## 医学・医療について

人の一生として与えられた百年前後の生の期間というのは、肉体が生きることのできる期間です。存在の大元となるこの肉体は、かけがえのない大切な尊い宝物です。その肉体内に、人間性豊かにして美しく深い心、崇高なる精神を宿し、生きるに必要な智慧と能力を養っての人生ですが、生きている間には必ず病気に追いやられ苦しみますゆえに、病気を治さなければなりません。病気治療は、人類数十万年数百年の歴史のなかで大きな課題でした。生きてゆく術を身につけてゆくことも、人としての人格形成も、あるいは生死のほどを悟るということも大事な課題でしたが、病気を治すということも大切な課題で、人類はひたすら求め続け今日もなお取り組む日々ですが、道を見失い、課題は広がり増え続けています。

ところで、先人の優れた智慧と能力、超人的な察知力、尊い努力の積み重ねと必死の経験と研鑽の結果、数千年前頃から少しずつ明らかにして、今から約二千年前にすべての病を治す医学を完成させています。古方の漢方医学です。それは自然界にあるものをもらって百年前後のいのちを生きるように、病気に陥った時も治してくれるものは自然界にすでにあって、自然界にある生薬のいのちをもらって病気を治すものです。それを薬草学として、人類の歴史のなかですでに働きの別を極め、同時に治療法を極

め、治療学を明らかにしています。

例えば、一つの病気のどこに原因があってどのようになっているのかを見分ける方法を示し、その病気に対していかなる生薬をいくら与えればいいのかを明らかにする具体的な治療方法が確立されているのです。いのちに応じるこの漢方医学は、たとえ同じ原因で同じ症状が起こったとしても、一人ひとりのいのちの強さ、生命力の強さが異なりますので、その見きわめ方とその人のいのちの強さへの応じ方も明かにしています。

この極められ大成された医学・治療学は、幸いにも人類の歴史から消えることなく、古典医学書として今日に残されています。この医学はいのちの医学で、いのちの舞台で起こっている出来事を、いのちの道に添って治してゆく医学です。そこには特殊な思想はありません。

例えば、西洋思想に対して東洋思想がありますが、その東洋思想のもとの漢方医学ではありません。西洋思想、あるいは東洋思想からの医学は、本当のいのちの医学ではありません。あるいはたとえ二つの思想を合わせても完全ないのちの医学、人間の医学にはなりえません。本当に病気を治すことのできる医学は、そうした西洋東洋の思想が根底にあるのではなく、思想を超えていのちの世界におけるいのちをよく観つめ、よく知ったところから完成されたものです。あるいは、それぞれの地方固有の伝統医学や民族医学がありますが、それらには地域性がありますが、すべての人のすべての病気を治すことはできません。いつの時代においても、いずれの地においても、すべての人のすべての病を治すことのできる普通の医学ではありません。古方の傷寒論、金匱要略に集大成されている漢方医学は、いつの時代にもどこにおいても通じる、すべての人のすべての病を治すことのできる地球生命圏におけるいのちの医学なのです。人類はすでに、真の医学・治療学を極めているのです。

中国の地で後漢の時代、すでにそれ以前から極められてきた医学・治療学が、張仲景氏によって古典医学書「<sup>しょうかんろん</sup>傷寒論」「<sup>きんきようりやく</sup>金匱要略」に著されましたが、二冊の本は元々一冊のものでした。「傷寒論」では、新しい病に陥った時の治し方を明らかにしています。例えば、風邪をひいて高熱が出て寒けがある…。あるいはやがて吐くとか下痢をする…。あるいは便秘をして高熱にうなされあらぬことを口走る…。あるいは女性が生理中に風邪をひき生理が止まって狂の状態に陥る…。そのようなことになった場合の新しい病気を正しく速やかに治癒させる道を示した書物です。「金匱要略」は、頭痛、鼻炎、花粉症、アトピー、便秘、腰痛、関節痛、心筋梗塞、脳の血管が破れる、精神病、あるいは自死をせざるを得なくなる等々、慢性化しているすべての病を治す道筋を示しています。

これはいのちの医学でありますから、医学書に活字で示されている言葉を理解するには、いのちを観なければ理解できません。単なる思想ではなく、いのちを観つめたいのちの思想でもあり、いのちを観つめ知ることによって正しく理解することができます。

例えば、風邪をひいた時に、ぞくぞくと寒けがする、頭が痛い、発熱する、関節が痛い、うなじがこはばる、汗が出ない。手の脈をみると緊張して力があって、皮膚の表面に浮いている。脈数が普通は60～90位なのに、100や120と速く多く強くなっている。これらの症状から、病の状態、原因のある場所、治し方を明らかにしてゆきます。このような場合は、生命力の強い人の風邪の引き始めで未だ風邪は身体の表面にあることを表しており、葛根湯を煎じて飲めば治ると示されています。事実、一服二服で根本から完全に治るのです。ところで、風邪を引いて、それほど関節痛は強くないけれども、足がだるい、なんとなくざわざわと寒けがあって、なんとなく頭が痛い、少し熱が出ている。少し汗が出る。脈をみると速く数が多くて浮いているけれども穏やかな姿をしている。その場合はそれほど生命力が強くないので、桂枝湯を煎じて服薬すれば、一服二服で根本から治ります。しかしこの時に葛根湯を飲むと悪化し病が深くなります。この意味は、その人のいのちに応じて別をつけた治療が必要だということです。

風邪にこの薬だと決まっています。葛根湯から桂枝湯までの間に、生命力の強さや起こっている症状によって、別があって多くの組み合わせがあります。風邪をひいて、あまり熱が出なくて寒い、元気がない、脈も小さく弱い。こうした人は生命力がもっと弱っていて死に近づいている人で、その場合は麻黄附子細辛湯等の類のものを用います。そのように風邪においても、その人のいのちに依じて別をつけないと治すことができません。その見分け方も「傷寒論」に示されています。

見分け方として、手と足の脈を診る。舌を診る。あるいは、お腹を診て、肋骨の下から腹部にかけて手で腹診をして、身体の中がどうなっているかを察知します。あるいは患者さんに問診をして、困っていることや何が起こっているかを聞きます。あるいは望診といって、その人の姿全体を診ることによって察知判断してゆきます。それらのことから、その人のいのちの強さ、生命力がどの程度なのか、病気はどこにあるのか、その病気はどのような状態なのかを明らかにして、答えを見出してゆきます。すべての病気の原因がある場所は、胴体とその内側であって、大切な働きをしている内臓内腑にあります。頭が痛いのも、足が痛いのも胴体のいずれかに原因があり、どこに原因があるのかを明らかにしてゆきます。あるいは、その病気は血液に関する問題なのか、水に関する問題なのか、気に関する問題なのか、あるいは食べたものに関する問題なのか、それらの別をつけてゆき、治癒に導く答えを見出します。いずれも治癒に導くに必要な治療法は書物に示されています。治療者はこの古典書を深く読み取り、すべての病気に対応する治療能力を養い育てることによって、すべての人のすべての病気を治癒せしめることができます。

今日の医学では、風邪を治す薬はないと言われていますが、すべての人の風邪を治す医学はすでにあるのです。それに必要な薬は化学合成して作らなくても、自然界にすでにあるものからすべての病気を治すことができるのです。そして、現代では不治の病と言われたり、原因不明の病と言われているものでも治すことができるのです。原因不明や不治ということはなく、それは治療能力が養われていないということです。

また、すべての病を治す医学としてすでに完成されているのですが、治療者はその医学を習得して、患者さんの状態を正確に見て、正確な答えを出さなければ治すことはできません。漢方薬は治療を間違ったならば、さらに悪くさせてしまいます。副作用の比ではありません。合えば絶妙に治るのですが、間違えたならば必ず悪化させ死なせてしまいます。今日西洋医学の代替医療としても取り上げられ、医療の現場でも漢方薬、特にエキス剤で多く使われていますが、漢方医学の基本となる理を正しく理解し、深く学び極め経験を重ねて技術能力を修得し、病気を察知判断する智力を高め、その上に患者さんのいのちを観る目を養っていないと大変な間違いと大きな大きな不幸を招きます。

あるいは漢方薬はなかなか効かないとも言われていますが、そんなことはなくて即効です。新しい病の風邪の引き始めに一服二服飲めば即治るのです。慢性病の場合は、長い時間のなかで経過しての病気ですから、時をさかのぼりながら治していきます。お薬を飲むとその働きで患者さんの状態が変わりますので、その状態に対応しながら生薬を加減し、時間をかけて治癒まで導いていきます。一世代前の病気、先天性の病気も治すことができるのです。今のいのちは過去の続きで、この今に過去も一つとなって営んでいるゆえに、時をさかのぼる如くにして今に治すことができるのです。精神病も特殊な病ではなくて、生きている肉体に原因があって起こっている出来事です。その人の肉体に依じての治療をしてあげたならば見事に治ります。肉体も精神も心も一つのものとして存在し営んでおり、切り離すことはできません。心の病を心に働きかけることなく、肉体に正しく働きかけてやれば、心も肉体も正常な健康体を取り戻します。

これはいのちの医学で、人が作った機械の修理の如く決まった形や決まった治し方があるのではなく、

一人ひとりのいのちに、症状に、原因に、病気の場所に依じて治していかなければなりません。

完成された医学をすでに人類は手にしているのですが、その医学を今では大半の人が捨ててしまっています。日本では明治以降に捨てました。ここにきて、この真のいのちの医学を修得し、いのちを観て、その人の身体の状態を見きわめて、すべての人のすべての病を治す治療能力を養ってゆかないといけません。それに必要なものはすでに書物に残されているのですから…。必要な生薬はすでに自然界にあるのですから…。その書物の読み取り方は難しいものですが、過去の人達も研鑽を重ね、経験を重ね、多くの治験例や読み取り方を示す書も残していますので、それらを紐解き勉強してゆけば必ず理解することができ、治療者は病み苦しむ病人を救ってあげることができます。また一人ひとりが病からの自立を成すことができます。医の分野にたずさわる人々が発心努力すれば、今日の混迷の医学・治療学の世界とそこから生じる諸問題は根本からの解決に至ることができるのです。病からの自立、完全な治療能力を手にすることができるのです。

人類は今日まで生きてきたなかで、病気の治し方も、生き方も、基本の生活の仕方も、衣食住すべてにおいて、すでに完成させているのです。でも後の人は何が大事かを見失ってしまって、それらを捨ててしまっているのです。二千年前の過去にさかのぼるのではなく、人類は真の医学・治療学を今に手にしないとといけません。すでにあるのです。それには過去の人々が極めたものを今に生きる者が受け取り極めないと、一人の一生百年前後の生の期間のなかで自分一人の力だけでは及びようのないものです。過去の続きの今を生きる私達、過去から切り離すことのできない一体の存在であり営みをしておりますゆえに、過去からの人類の智慧と尊い遺産のすべてをもらい受けることができるのです。そうすれば、この今に生きる人類がそれぞれの人生でその恩恵にあずかることができるのです。

## 政治と経済について

百年前後の人としての生の営みを全うするに欠かせない、あるいは今を生きるに欠かせない某かの分野があります。それぞれの分野の本質を明らかとし、真の答えをきわめ、一人ひとりが、人類全体が、人間社会が、いのちの道・人の道からはずれることなき秩序を得て、平和に心豊かに幸福に生きることができるようになるべきではありません。生きるに欠かせぬ食物を得る農と食、あるいは衣と住。自らを育み次世代を教え導き育む教育。恐れ苦しむ病気を治癒する医学・治療学。虚無となり無味荒廃悲哀に陥り、醜に悪に偽りにも魂奪われて暗闇のなかで道を得ず不幸にも陥る人生を情緒豊かに美しく歓喜の人生とする芸術。怖れおののき耐え難きにも陥る人生の深き意味と意義を悟り大安心を得る宗教。いずれも欠かすことのできない大切な分野です。また人間が集団を成して生きてゆくに重要な政治。生きてゆくに必要不可欠な物を得る経済。いずれも是非に本質を明らかとし、真の答えを見出し、すべての分野における智力能力を養い身につけ、総合力を得た全き人に、そして人類に成長いたさねばなりません。

政治の分野においては、自らを治める、家を治める、地域を治める、国を治める、あるいは国土を治め、地球を治め、宇宙を治め、さらには世界を治め、人類を治めることのできる、真の理にかなった美しい誠の豊かな政治力を養わねばなりません。経済の分野においては、生きるに必要なものを自然界・生命界から、あるいは社会から他人から、足るを知り悟って、過不足なく無駄なく美しく絶妙に得て、絶妙に用い、絶妙に生かし、無駄なく生活することのできる大いなる優れた真の経済力を養わねばなりません。

政治力というのは、支配欲、権勢欲をほしいままにし、安易で怠惰華美を好む欲望を満たし、自己中心、自国中心、人類中心の欲からの執着を具現化する愚かなおぞましい智力能力ではありません。経済力とい



うのは、より多くのお金を手にし、足るを知ることなく多くを集め、有限にしてかけがえのないのちの舞台を消費し、あるいは物欲に心奪われ神聖なる魂を失った黒き智力能力ではありません。

今日私達が生きてゆくに必要な食糧を得るために限りなく多くの資源を消費浪費し、環境に地球にいのちに次々と問題を招き、返済不可能の負債を重ね、実に大きな無駄と不経済をしており、日々の生活も政治においても自然界・生命界を損ね汚染破壊を加速させるものになっています。私達人類は未だ真の経済力、真の政治力を養い身につけておりません。貨幣経済中心の物質文明・化学文明をひた走る今日、物を過分に作りお金に換えている多くは、私達人類をはじめすべてのいのちが生きることのできる自然界・生命界にある大切なかけがえのない舞台からの搾取であります。大元を壊し消費してはいけません。消費をよしとし、消費を促し、消費すればするほど経済的に豊かになるという錯覚から目を覚まさねばなりません。

## 宗 教 に つ い て

我が身心を清めたいというのも宗教心の基本となるものです。あるいは新しいのちを愛おしく思うのも、私のいのちを大事にするというのも宗教心の基本となるものです。自然界の美しさに感動し、情緒の美しく豊かな慈悲深い人に育ちたいと願うのも宗教心と芸術心が一つになって働いてのことです。また花のいのちや小さな生き物や幼子に愛おしみを覚え他を尊重し、先人を尊敬する心も、宗教心働いてのことです。

すべてを生死に運ぶ、いのち自ずからの自然界・生命界です。その本体を神という言葉で認識するならば、すべてのものが神の子です。あるいは本体の子、宇宙自然の子です。一人ひとりの存在は神の性、本体の性、宇宙の性を宿した聖なるものです。そこに立つことができたならば、魂からの安心立命に至ることができます。自らの神性を見失い、そこから離れてしまっている時に恐れと不安に陥り、存在の悲哀に染まってしまうことにもなります。

祈りは宗教的行為の一つです。恐れと不安に陥った時に、唱える言葉を何か持っていたならば、それを唱え続けているうちに不安から解放されて平安を得ます。「神様助けてください、神様助けてください。」と唱えることによって、神様が助けにきてくれるのではなくて、私が見失ってしまった私のなかの本体の性を取り戻され、神性を宿した本来の自分として立ち返ることができ、不安から解放され安心立命に至ることができます。あるいはもとよりの本体、あるいは神と一つになることによって平安に至り、的確な判断ができ、するべきことができ、あるいは全智全能が働く私と成ります。

それが真の私、真のいのちであり、真の人であります。神の性、仏の性、本体の性、宇宙の性が自らのなかで目覚め働き、大いに発揮発動し、本来の人と成る時、本体とも別なく一体となり、神とも別なく一体となつての全き自己実現を成して、平安の極み、幸せの極みです。絶対にして相対を極めた境地、一体にして個々別々を得た境地、時空を得、時空の別を知り、時間空間の分を悟り体現した境地でもあります。

宗教は人生において欠かすことのできぬ分野であり、宗教心は誰しものが内に宿し、善を喜び、美を好み、真を尊び、妙なる人として解放された大いなる宗教心が働いて、喜び深き意義多い本来本然の人生となります。

## 芸術について

人としての人間性の成長に欠かすことのできない分野として、あるいは人の道を明らかにするに欠かすことのできない分野の一つに、芸術があります。芸術の分野における本質と答えを明らかにして、この百年前後の生の期間、喜びの日々に、美しく心豊かで味わい深く意義多い人生にいたさねばなりません。もし、醜から離れ、美を求め美に生きることを怠れば、一人ひとりが織りなす人間社会が精神健全にして平和になることはあり得ません。

芸術性、芸術心を美しく養う時に、宗教性、宗教心を同時に善なるものに養うことによって、芸術性が高くなり、芸術心が深く美しく豊かに養われます。人間性の成長は、芸術性の成長、宗教性の成長と切り離すことができないもので、総合的に養っての成長であります。この人格形成の基本は、美醜の別、善悪の別、真贋の別をつけ、美しい心、善き心、真の心によく働く大いなる自由人となることです。私達の心のなかには、いずれともなる性質をもっています。美しい心、醜い心の両面、善き心、悪しき心の両面、真の心、贋の心の両面の性を宿し現すゆえに、別を明らかとして、醜から悪から贋から離れねばなりません。魂からの安心立命と心豊かで楽しい喜びの日々に、神の性、仏の性が大いに働く人本来の全き人生であるべく、自らの内に宗教心を養い、芸術性を清く高く尊いものに育て、人間性を豊かに育むことが、人生において、そして人類にとって非常に重要となるものです。

このとき美と醜の別をつけることのできる審美眼を是非に養わねばなりません。自然界に醜はなく美そのもの、善そのもの、真そのものでありますが、私達人の心の内に醜悪贋があります。自らの内をよく観つめて、美醜の別をつけ、醜を好まず、醜に陥ることなく、醜から離れ、また醜を退け決して許さず、美を好み求めたたえ、美を迎え入れる私達一人ひとり、あるいは人間社会であらねばなりません。人の本性は美を好み、善を愛し、真を喜ぶ神聖なるものでありますが、つつい真の我を見失い、醜に悪に贋に魂を奪われてしまいます。心せねばなりません。自らの内を問わねばなりません。また、美そのものにして完全絶妙のこの自然界あつての私達人類の存在であります。かけがえのない大切な自然界の美しさ、絶妙さ、神秘さを観ることができ、自然界の意義と意味を悟り知る人類に成長いたさねばなりません。

また、人間性の成長には、境地の獲得も欠かせません。正しい境地とは、自然界・生命界においてすべてと一体なる絶対界に一人で立ち、解放された真の自由のなかで正しく生きている状態のことです。人間社会においても、相対界に落ちて他に依存することなく対立することなく、競うことなく争うことなく、一体であつて個々別々を極め、一人で正しく立ち生きている姿のことです。このいのちの世界で、いのちの道、人の道、我が道を得て、正しく一人で生きてゆくに欠かすことのできない強靱なる魂、崇高なる精神、美しく優しき情緒、濁ることなく晴れ澄み渡った深き智慧、絶妙の技術・能力を養い育み、開放された真の自由を得て、いずれも障ることなく発揮することのできる大いなる境地の体得が必要となります。

すべてのいのち達みな生きている時は道を得て絶妙に生き、死ぬ時は死んでいのちの道からはずれぬこと自ずからにして人もまた然りではありますが、人はその上に人としての正しき道を得なければなりません。

ところで、今日の社会における芸術界は、正しい芸術の意義と本質と目的を見失い、混沌混乱著しく、暗闇の中に陥り、道を得ず知らずとなっています。美醜の別をつける意味を知らず悟らず、多くの批評家も芸術家も審美眼を持たず養わず、醜を社会にまき散らし、醜を価値づけ褒めたたえて無秩序の極みです。美を善を真を正しきを旨とし、醜を悪を偽りを不正を許さぬのは人として当然であり、内なるところで良心を持っているはずであります。芸術の分野における多くは、価値づける美の物差しを捨て去り、神性を踏みにじり、人間性を問わず明かさず、価値をすっかり逆転させています。このことによって生じる芸術における精神の退廃荒廃はすべての分野に現れ、人々の不幸に、人間社会の退廃に、さらには人類滅亡

への加速として現れるもので、芸術の本質を明らかとし正さねば大変であります。

## 教育について

僕は、青年期を終え壮年期を終え老年期に入った今、どのように生きるのが老年期としての全うな生き方なのか、あるいはやがては老年期の後半に入ってゆきますが、どのようにあれば人として成熟し豊かに美しく全うできるのかを問われています。残りの時、自分をいかに育めば豊かな妙なる実りの人生になるのか、自らをいかに育てれば全うでき完結できるのかの答えを出しつつ生きねばなりません。

自然界における諸々のいのちたちは、いのちの営みそのまま全き生き方で、問うことなく間違うことなく違えることなく逃避することもなく、我がいのちを絶妙に全うしてゆきます。ところが、人は容易に全うできない生き物です。いのちの世界を見失い、本来の正しい道からはずれているのは人類だけなのです。生死の意味を悟り、生きる覚悟をいたし、自らを正しく育まないと、あるいはいかに育めばいいかを明らかにして自らを養ってゆかないと全うできません。乳幼児期、少年少女期はそうしたことを考えることなく、生かされるなかで両親祖父母の庇護のもとで親の愛情に抱かれ乳幼児期を生き、やがて少年少女期は天真爛漫に自然界を駆けめぐることのできる時期ですが、青年期に入り自立の年代になると、我が一生をいかに生きればいいのか、そしていかに自らを育くめばいいのかを深く考え、認識し、言葉を通して明らかにしなければなりません。常に問われていると同時に、真の答えを見出し、答えを生きるべく、自らを養い育む人生としなければなりません。

また、私のいのちの全うは、次世代のいのちを養い育てることと切り離せません。お米はそうしたことを考えることもなく、我が一生を全うすれば、次の子孫を豊かに育て見事に生み増やして、親は死んでゆきます。自然界におけるすべてのいのちは、我がいのちの全うは、次のいのちを見事に育てる営みと別がなく一つになっています。人も我が一生を美しく豊かに全うして生きれば、同時に次の世代が見事に育っているのが本来です。しかし、私達人間は自他の別なく一体を生きることできずに別に陥りがちゆえに、次の子孫、次の世代を絶妙に育てるべく、私のあり方、親のあり方を明らかとし、自らを育み成長をなし、同時に次の世代をどのように教育育み養うのかをも明らかとして養い育ててゆかねばなりません。

川口 由一（かわぐち よしかず）

自然農実践者、指導者。妙なる畑の会、赤目自然農塾主宰。昭和14年奈良県磯城郡纏向村（現桜井市）の小作農家に長男として生まれる。小学六年の時に父親を亡くし中学卒業と同時に専業農家となる。化学肥料・農薬・機械を用いる農業23年間行なうなかで心身共に疲労衰弱し、生命を損ね環境を汚染し資源を浪費する農業の誤りに気づき、38歳の時に「耕さず、草や虫を敵とせず、肥料農薬を用いない」自然農を始める。試行錯誤をくり返すなか、いのちの営みに添う自然農の栽培技術とその理を確立する。自然農31年の歩みのなかで、人々の求めに応じて自然農を教え伝えてきた。現在は、二反半の田畑で自給用と勉強会用にお米と野菜を育てながら、自宅での自然農の「見学会」「合宿学習会」、奈良県と三重県の県境で実践を伴った学びの場「赤目自然農塾」、自然農実践者のための学びの場「全国実践者の集い」を主宰する。また傷寒論・金匱要略を源とした漢方医学を、医の自立に向かう人達の求めに応じ指導する。著書に、「妙なる畑に立ちて」（野草社 H2）、「自然農から農を超えて」（カタツムリ社 H5）、「自然農-川口由一の世界-」共著（晩成書房 H12）、「子どもの未来と自然農-川口由一自然農・子育て・家族を語る-」共著（東京賢治の学校 H13）、「自然農への道」編共著（創森社 H17）等。映画に、「自然農-川口由一の世界-1995年の記録」。